

わが国における「海景観賞の型」とその空間構成に関する研究*

—江戸名所図会にみる視覚構造を通じて—

A Study on Types of Ornamental Seascape and its Space Structure in Japan*

—From visual construction in 'Edo-Meisho-Zue'—

岡田 智秀**・横内 憲久**・島 妃沙子***

By Tomohide OKADA **・Norihisa YOKOUCHI**・Hisako SHIMA ***

1. 研究目的

ウォーターフロント開発の魅力の一つは、広大な海や船舶の航行といったウォーターフロントならではの景観（これを海景とする）が眺められるところにある。こうした海景を観賞する方法は、海景とそれを眺める人との間に建築物を介在させることで、さまざま生み出されていくと考えられる。しかし、近年のウォーターフロント開発では、建築物単体の機能や形態といった表層的な部分に重点がおかれることを要因の一つとして、海景とそれを眺める人との関係の希薄化が懸念されている¹⁾²⁾³⁾。よってウォーターフロント開発では、建築物の高い操作性を活かし、開発地における海の特性（魅力）と、それを眺める人との関連性を考慮した整備を行うことで、良好かつ多様な海景を創出していくべきと認識する。

こうした観点から本研究は、人と人が眺める海景との間に介在する建築物を、海景の魅力を高める装置として位置づけ、それが果たす景観的役割を導くものである。

そこで本論では、江戸期から現在までに長きに渡り愛でられてきた「江戸名所図会」⁴⁾を分析資料とし、「人」「建築物」「海景」の3要素の関係から創出される「海景観賞の型」を抽出し、各型を成立させる要件（成立要件）を捉えるために、各型の構成要素がどのような関わりをもち、それらがどのように眺められていたのか、その視覚構造について解明することを目的とする。

ここでいう視覚構造とは、人が空間を認知する際に必要な視知覚特性（視野角・視距離等）からみた空間の成り立ちを意味するものであり、この「視知覚」という人の身体能力から捉えた観賞形態は、「空間認知のしやすさ」という点で有意義かつ普遍性の高い解が得られるものと認識する。

*キーワード：景観、親水計画、空間整備・設計

**正員、工博、日本大学理工学部海洋建築工学科
(千葉県船橋市習志野台7-24-1、TEL&FAX:047-469-5427)

***学生員、大学院生、日本大学大学院理工学研究科
海洋建築工学専攻

2. 「海景観賞の型」の抽出

(1) 分析対象絵図の選定方法

「人」「建築物」「海景」という3要素が関わる「海景観賞の型」を抽出するに際しては、まず分析資料とする「江戸名所図会」において3要素が同時に描かれている絵図（事例）を選定する。

ただし、絵図に「人」「建築物」「海景」が描かれていても、絵図中の3要素それぞれが小さ過ぎて茫漠としたものであったり、また一部の要素が背景的に描かれているなど、3要素間の積極的な関わりが見出せないと判断したものについては分析対象外とする。

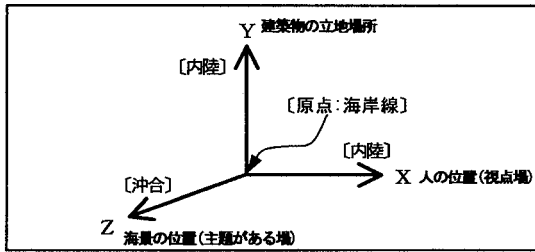
分析対象とする3要素の特定にあたっては、「江戸名所図会」に記載された各名所（事例）の解説文や絵図の題名（主題）に着目し、その内容と絵図を照らし合わせて判断する。つまり、各名所の解説文等から景物となる「海景」を抽出し、それと関連の深い「人」と「建築物」を絵図から特定する。

以上の方法に基づいて得られた3要素の関わりが密接な対象絵図は、「江戸名所図会」に掲載された全絵図（649事例）のうちの21事例となり、この中から1枚の絵図であっても複数の視点場・建築物・海景が特定できる場合もあり、合計31景が抽出できた。このことは同時に、各絵図において「人」「建築物」「海景」の関連性が特定できたことを意味する。

(2) 選定絵図から型を抽出する方法

「人」「建築物」「海景」の3要素は、それらの位置関係によって、海景の眺め方（観賞方法）や海景の見え方が異なってくると考えられる。

そこで、3要素の関わりから創出される「海景観賞の型」を抽出するにあたっては、分析対象絵図31景について、「人」「建築物」「海景」の3要素それぞれの位置を図-1に示す各軸上（X、Y、Z軸）に布置し、3要素の交点である空間座標の集合と「人」「建築物」「海景」の状況を照らし合わせて類型化を行うこととした。



図一 「人と建築物と海景」の関係を表すための3軸

型を得るために用いる図一1は、原点を海岸線として、X軸は人の位置（視点場）、Y軸は建築物の立地場所、Z軸は海景の位置（当該絵図の主題や解説文で描写された視対象などがある場）を表している。したがって、各軸いずれも原点から離れるほど海岸線から遠ざかること（「人」「建築物」は内陸方向、「海景」は沖合方向）を意味する。

なお、海岸線を原点としたのは、31景の全分析対象絵図における3要素共通の位置が海岸線となったことから、それを基準として3要素の位置関係を捉えたかったためである。

分析対象とする31景のX、Y、Zの座標を求めに当たっては、人の位置（視点場）、建築物の立

地場所、海景の位置それぞれにおいて、分析対象となる全絵図を海岸線に最も近い絵図から最も遠い絵図まで相対的に序列をつけ、その序列を各軸に示された海岸線からの距離の序列を意味する目盛上に布置する。

この手順によりX、Y、Zの各軸の座標を決定した後、それらの交点を求め、これを当該景の空間座標とする。

各軸の目盛は、表一1に示すように、全分析対象絵図から特定した「人」「建築物」「海景」の位置を把握した結果、人の位置（視点場）と建築物の立地場所は6通り、海景の位置は7通りに分類できたことから、各軸それぞれ海岸線から近い順にX1～X6、Y1～Y6、Z0～Z6とした。

なお、本分析において海岸線を基準とした序列（遠近）を実距離ではなく等間隔の目盛で決定したのは、実距離という子細な情報でなくとも、作業が簡便な3要素の相対位置の把握により、実距離と同様の比率で3者の位置関係が把握できること、また、本研究が意図する海景の見え方や観賞方法も明確に分析できるためである。

表一 「人」「建築物」「海景」の特定とその位置となる目盛

No	絵図名	人		建築物		海景	
		人の位置（視点場）	目盛	建築物の立地場所	目盛	海景の位置（主題または視対象）	目盛
1	御蔵山 看花	まちなかの小高い丘・山	X ₅	まちなかの小高い丘・山	Y ₅	水平線（月の出）	Z ₆
2	八景坂 鐘樹松	まちなかの小高い丘・山	X ₅	まちなかの小高い丘・山	Y ₅	沖（海を望む）	Z ₅
3	神奈川臺	海岸から切り立つ高台	X ₄	海岸から切り立つ高台	Y ₄	沖（海を眺める）	Z ₅
4	金龍院 飛石	海岸から切り立つ高台	X ₄	海岸から切り立つ高台	Y ₄	沖（海を眺望する）	Z ₅
5	清澄寺	小高い丘・山	X ₅	小高い丘・山	Y ₅	水平線（日の出）	Z ₆
6	寒橋	海道	X ₂	海岸線沿い	Y ₁	沖（大海）	Z ₄
7	佃島 住吉明神社	海道	X ₂	海岸線沿い	Y ₁	沖（船の航行）	Z ₄
8	町屋村 龍華寺	海道	X ₂	海岸線沿い	Y ₁	沖（船の航行）	Z ₄
9	寄木明神社	海道	X ₂	海岸線沿い	Y ₁	沖（船の航行）	Z ₄
10	洲崎弁天	海に突き出した道	X ₁	海岸線沿い	Y ₁	沖（船の航行）	Z ₄
11	瀬戸辨財天	海に突き出した道	X ₁	海岸線沿い	Y ₁	沖（大海）	Z ₄
12	瀬見坂	まち並みを見渡せる丘陵	X ₆	まち並みを見渡せる丘陵	Y ₆	沖（潮見）	Z ₅
13	洲崎辨財天社（Ⅰ）	海岸線沿い	X ₁	海岸線から後退した陸域	Y ₂	波打ち際（海岸の真砂）	Z ₁
14	洲崎辨財天社（Ⅱ）	海岸線から後退した建築物の内部	X ₂	海岸線から後退した陸域	Y ₂	波打ち際（海岸の真砂）	Z ₁
15	洲崎辨財天社（Ⅲ）	海岸線沿い	X ₁	海岸線から後退した陸域	Y ₂	岸寄りの海上（千鳥）	Z ₂
16	洲崎辨財天社（Ⅳ）	海岸線から後退した建築物の内部	X ₂	海岸線から後退した陸域	Y ₂	岸寄りの海上（千鳥）	Z ₂
17	瀬戸橋（Ⅰ）	海岸線沿い	X ₁	海岸線から後退した陸域	Y ₂	岸寄りの海上（水鳥）	Z ₂
18	瀬戸橋（Ⅱ）	海岸線から後退した建築物の内部	X ₂	海岸線から後退した陸域	Y ₂	岸寄りの海上（水鳥）	Z ₂
19	瀬戸橋（Ⅲ）	海岸線沿い	X ₁	海岸線から後退した陸域	Y ₂	沖（遠い山の奥の眺め）	Z ₅
20	瀬戸橋（Ⅳ）	海岸線から後退した建築物の内部	X ₂	海岸線から後退した陸域	Y ₂	沖（遠い山の奥の眺め）	Z ₅
21	瀬戸明神社（Ⅰ）	海岸線沿い	X ₁	海岸線から後退した陸域	Y ₂	波打ち際（打ち寄せる波）	Z ₁
22	瀬戸明神社（Ⅱ）	海岸線から後退した建築物の内部	X ₂	海岸線から後退した陸域	Y ₂	波打ち際（打ち寄せる波）	Z ₁
23	瀬戸明神社（Ⅲ）	海岸線沿い	X ₁	海岸線から後退した陸域	Y ₂	沖（出島の縁）	Z ₃
24	瀬戸明神社（Ⅳ）	海岸線から後退した建築物の内部	X ₂	海岸線から後退した陸域	Y ₂	沖（出島の縁）	Z ₃
25	行徳衛	海岸線から後退した建築物の内部	X ₂	海岸線から後退した陸域	Y ₂	岸寄りの海上（千鳥）	Z ₂
26	高輪海邊 七月二十六夜待	海道の陸側にある建築物の内部	X ₃	海道	Y ₃	水平線（月の出）	Z ₆
27	高輪大木戸	海岸線沿い	X ₁	海岸線沿い	Y ₁	波打ち際（渚の真砂）	Z ₁
28	品川驛	海岸線沿いの建築物の内部	X ₁	海岸線沿い	Y ₁	波打ち際（入り江）	Z ₂
29	羽田辨財天社	海岸線沿いの建築物の内部	X ₁	海岸線沿い	Y ₁	海岸線（青松や苔）	Z ₀
30	瀬戸明神社（Ⅴ）	海岸線沿いの建築物の内部	X ₁	海岸線沿い	Y ₁	波打ち際（打ち寄せる波）	Z ₁
31	洲崎明神	海道	X ₂	海岸線沿い	Y ₁	海岸線（海道）	Z ₀

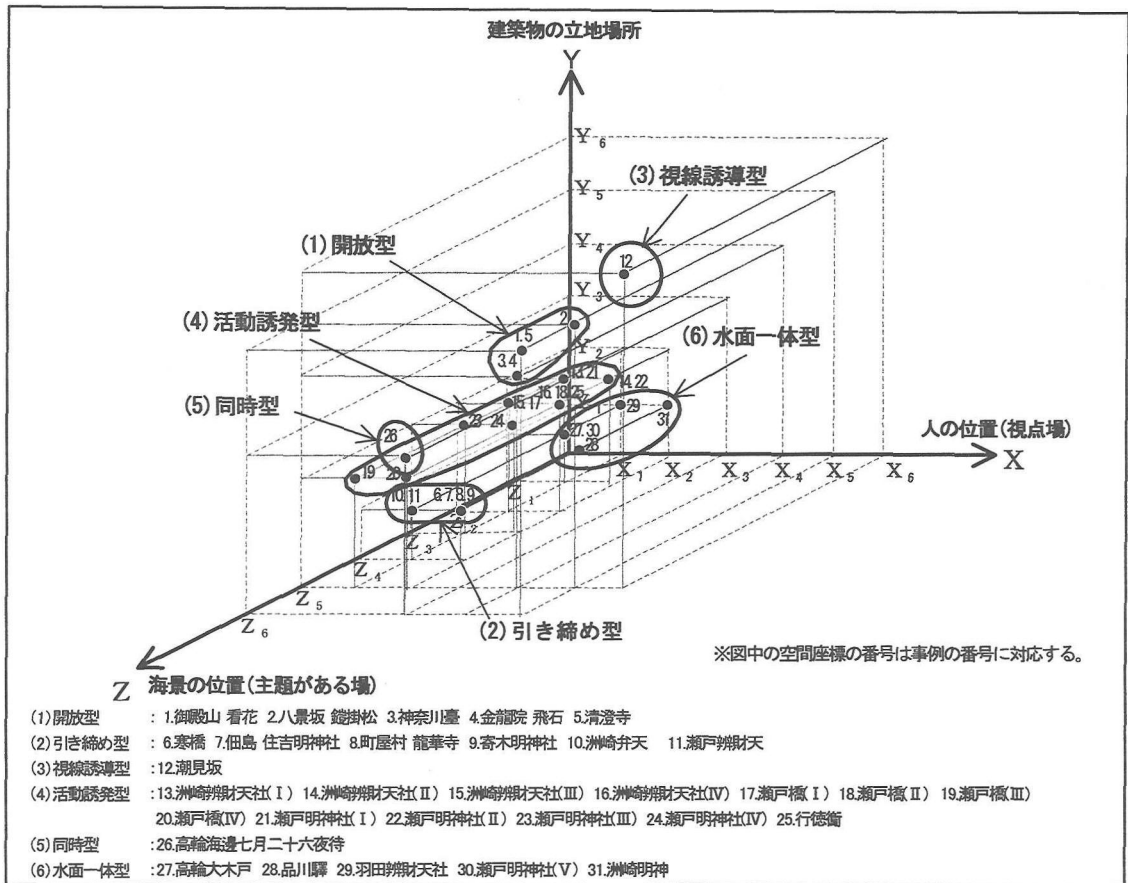


図-2 「人と建築物と海」の関係からみた海景観賞の型

(3)「海景観賞の型」の抽出

以上の方法によって、全分析対象絵図 21 事例 (31 景) の空間状況 (表-1) に基づき、各絵図の空間座標を示したものが図-2 である。

この図-2 に示す空間座標の集合具合と表-2 に示した各特徴により、「開放型」「引き締め型」「視線誘導型」「活動誘発型」「同時型」「水面一体型」という 6 つの「海景観賞の型」が得られた。

そこで、以降では「海景観賞の型」の成立要因を捉えるために、視覚構造を通じてみた各型の空間的特徴について考察する。

3. 視覚構造からみた「海景観賞の型」の成立要因

(1) 各型の視覚構造の分析方法

各型の視覚構造を把握するにあたっては、これまで明らかにした 6 つの型を成り立たせている 21 事例 (31 景) の絵図を分析対象として、平面・断面を構成する要素の実寸を求める。

具体的には、各型の平面を構成する要素 (街道

の幅、視点場・建築物等の海岸線からの距離) については、当該要素が当時存在した位置を江戸時代末期の市街の実測図である「復元・江戸情報地図」⁶⁾ から、またその資料に載らない要素「明治前期手書彩色関東実測図」⁷⁾ から求めることとする。

一方、各型の断面を構成する要素 (視点場・建築物等の高さ) について、視点場は地形図⁷⁾ を用い、建築物は、絵図中に描写された建築物それ自体の諸元を記した資料が見当たらなかったため、当時の建築物に関して一般的な諸元が記された資料⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾ に基づいた。

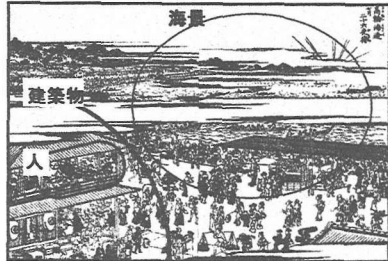
なお、上述した資料から建築物の幅・奥行等の寸法が特定できない要素は、実寸が得られた要素と当該要素との絵図中の構成比率からその寸法を捉えることとする (図-3)。

以上の方法によって分析可能であったものは、21 事例 (31 景) 中、19 事例 (20 景) であった。

その分析結果を示したものが表-3 であり、以降では表-3 に基づき、「海景観賞の型」の成立要件を型別に述べていく。

表-2 「海景観賞の型」の特徴と型を成り立たせる「人」「建築物」「海景」の特徴と典型例

型名	型の概要	人（視点場）	建築物（形態・立地場所）	海景（視対象）
(1) 同時型	陸・海上それぞれのにぎわいを高い視点場から同時に一望できることで、陸と海という異なる空間の一体感が楽しめる。	・海岸線沿いの繁華街に立地する建築物内の高い座敷(2階など)である。	・海岸線から後退して立地することで、海岸線沿いににぎわいを創出している。 ・2階などの高い位置に座敷(視点場)がある。	・海岸線沿いの陸域のにぎわいと、海上の船舶等のにぎわいが同時に創出されている。
(2) 開放型	高台に立地する建築物内に視点場となり、その建築物の海側の壁面に大きな開口部があることで、眼前の自然物を介して眼下の海が一望できる。	・高台に立地する建築物の内部である。	・高台に立地する。 ・海側の壁面に大きな開口部をもった開放的な造りで、建築物内部から周辺の自然物とともに海景が広々と見渡せる。	・建築物周辺もしくは視点場と海景の間に自然事物(植物等)によって視線が海景へと誘導される。
(3) 視線誘導型	高台の視点場と視対象(海)の大きな高低差を海方向に下る坂道の沿道両側に立地する建築物などにより、内陸のまちなかのいながら遠方に広がる海へと視線が誘導される。	・高台(まちなか)の海方向に下る坂道である。	・高台に立地している。 ・海方向に下る坂道の両側に連立して、視点場から海方向へと視線を誘導する。	・海方向に下る坂道の地先に広がる。
(4) 引き締め型	海道を視点場として、海岸線沿いに連立する建築物の間隙(スリット)により引き締められた海景が、シークエンスとして眺められる。	・建築物が連立する海岸線沿いの海道である。	・接岸して連立している。 ・連立する建築物間にはスリットが設けられ、海景を垣間見ることができる。	・海道を視点場として、建築物のスリットからシークエンスとして海景が垣間見られる。 ・建築物のスリットを介するため、海景が引き締められる。
(5) 活動誘発型	出島上の建築物がアイストップとなるため、広大かつ茫洋として視線が定まりにくい海景が引き締まって見える。	・海に突き出した土地に立地する建築物が見える海岸線沿いである。 ・容易に往来できる建築物内(座敷・外)海岸線近傍の空地である。 ・屋内外を往来して海景を眺める。	・海側に突き出した土地に立地することで、広大な海のアイストップになっている。 ・海岸線沿いに立地する。 ・海側全面に開口部を造り、座敷と地面の高低差を小さくすることで、屋内外への移動を促している。	・海岸線から海側に突き出した建築物がアイストップとなり茫洋しがちな海景が引き締められる。 ・満潮時には豊かな水量、干潮時には干潟に息づく生物など、潮の干満に伴い多様に変化する。
(6) 水面一体型	接岸した建築物内の低い視点場(座敷)から水面の表情を見て水面との一体感が楽しめる。	・海岸線沿いに立地する建築物内部である。	・静穏域に接岸して立地している。 ・水面との高低差が小さい座敷をもち、海側全面に開口部が設けられている。	・波に洗われる木の枝などにより、湾内(静穏域)での水面の動きが強調され、水面の雰囲気が高められている。
	雁木や連立する建築物の連続効果によって際立った水面の表情が楽しめる。	・建築物が連立する海岸線沿いの海道にある。	・静穏域に接岸して連立している。 ・スリットが設けられ、海景を垣間見ることができる。	・雁木や連立する建築物の連続効果によって湾内(静穏域)での水面の動きが強調され、水面の雰囲気が高められている。



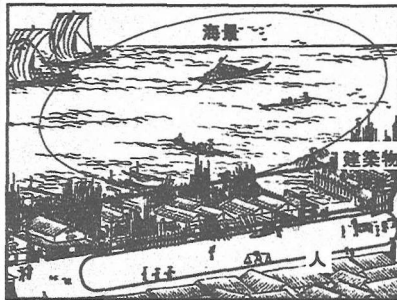
同時型の典型例「高輪海邊 七月二十六夜待」



開放型の典型例「御殿山 看花」



視線誘導型の典型例「潮見坂」



引き締め型の典型例「佃島 住吉明神社」



活動誘発型の典型例「瀬戸橋」



水面一体型の典型例「品川駅」



「復元・江戸情報地図」1:2500

$x_1=62\text{mm}$, $x_2=8\text{mm}$, $y_1=14\text{mm}$
海岸線から建築物Aまでの距離=X
建築物Bの奥行きの実寸=Y とする。

【海岸線から建築物Aまでの実距離Xの求め方】

$$X = x_2 \times \left[\frac{\text{縮尺}}{\text{縮尺}} \right] = 8(\text{mm}) \times 2500 = 20000(\text{mm})$$

【建築物Bの奥行きの実寸Yの求め方】

①絵図上においてこの事例を構成する要素である建築物Bの奥行き y_1 を測定

②絵図上における海岸線から建築物Aとの距離 x_2 と実距離Xとの比率により実寸Yを測定

つまり $Y : 14(\text{mm}) = 20000(\text{mm}) : 62(\text{mm})$ となる。

よって $Y = 4500(\text{mm})$



絵図「1. 高輪海邊 七月二十六夜待」

図-3 街道の幅員・建築物の奥行きの求め方(「高輪海邊 七月二十六夜待」を例として)

表-3 「海景観賞の型」の空間構成

型名	絵図名(所在地)	型の空間構成			
(1) 高輪海邊 七月二十六夜待 (港区高輪2丁目)		【海景】にぎわい景が視点場から約20mにある。	【海景までの視距離①】 視対象となる海景は(A)にある。	《建築物》内高さ20m 《視点場》高さ4.2~5m(建築物内)	【視対象の視認状況①】 陸と海がともに(B)に入る。
(2) 開港記念 御蔵山 香花 (品川区北品川3-4丁目) 八景楼 徳松 (大田区大森北1丁目) 金龍院 飛石 (横浜市金沢区瀬戸) 神奈川樓 (横浜市神奈川区神奈川1丁目)	御蔵山 香花 (品川区北品川3-4丁目)	【建築物】高さ2.1mの庇張り	【視点場の状況①】 建築物は海側の壁面を全面開口し、開放的な造りである。	《視点場》内高さ約230~280m、標高約10m(建築物内) 【視角】4°	【視対象の視認状況②】 海景は(B)に含まれない。
	八景楼 徳松 (大田区大森北1丁目)	【建築物】高さ2.1mの庇張り		《視点場》内高さ約800m、標高約15m(建築物内)	
	金龍院 飛石 (横浜市金沢区瀬戸)	【建築物】高さ2.1mの庇張り		《視点場》内高さ約80m、標高約10m(建築物内) 【視角】8°	【視対象の視認状況③】 海景は(B)に含まれる。
	神奈川樓 (横浜市神奈川区神奈川1丁目)	【建築物】高さ7.5mの茶室		《視点場》内高さ20~40m、標高約5m(建築物内) 【視角】15~45°	
(3) 開港記念 潮見坂 (港区三田3丁目)		視点場となる坂の勾配1:7	【視点場の状況②】 視点場は(C)の坂にある。	【道の幅員と建築物高さの比】1.2:1	【視点場の状況③】 (D)の開放空間
(4) 引き締め効果 仙居 住吉明神社 (中央区船場1-2丁目) 金木明神社 (品川区東品川1丁目) 町屋 龍蔵寺 (横浜市金沢区洲崎町) 茶室 (中央区築地7丁目) 潮見弁天 (品川区東品川1丁目) 潮見神社 (横浜市金沢区瀬戸)	仙居 住吉明神社 (中央区船場1-2丁目)	《建築物》内高さ約2.5~5m 《視点場》内高さ約8~10m	【建築物までの視距離】 視対象となる建築物は(E)にある。	【建築物間のスリット】18m	【視対象の視認状況⑤】 建築物は(F)に含まれない。
	金木明神社 (品川区東品川1丁目)	《建築物》内高さ約1.5~6m 《視点場》内高さ約3.5~8.5m		【建築物間のスリット】22m	→ 沖合200mにある仙居がアイストップとなり、引き締め効果を支える。
	町屋 龍蔵寺 (横浜市金沢区洲崎町)	《建築物》内高さ約2m 《視点場》内高さ約8m		【建築物間のスリット】6m	→ 沖合約650mに伊豆・新江の船がアイストップとなり、引き締め効果を支える。
	茶室 (中央区築地7丁目)	《建築物》内高さ約0m 《視点場》内高さ約6m		【建築物間のスリット】1.8m	建築物は(F)に含まれる。
(5) 活動型 潮見神社 (品川区東品川1丁目) 潮見神社 (横浜市金沢区瀬戸)	潮見神社 (品川区東品川1丁目)	【建築物】内高さ約110m 【視点場と建築物との距離】約90m	【視点場の状況④】 屋外視点場となる海側のスペースは(A)と(G)を満たす。	【海景】視点場から約3~12mの位置	【海景までの視距離②】 視対象となる海景は遠近さまざまな場所にある。
	潮見神社 (横浜市金沢区瀬戸)	《建築物》内高さ約8m		【海景】視点場から約160m以内で潮の干満により変化する	
	潮見神社 (横浜市金沢区瀬戸)	《建築物》内高さ約5m	屋外視点場となる海側のスペースは(G)を満たす。	【海景】視点場から約20mと約100mの位置	
(6) 水面一体型 高輪大木戸 (港区高輪2丁目) 品川驛 (品川区北品川1丁目) 羽田神社 (大田区羽田6丁目) 潮見神社Ⅱ (横浜市金沢区瀬戸) 潮見神社 (横浜市神奈川区青木町)	高輪大木戸 (港区高輪2丁目)	【海景】視点場から約6mに位置する。	【海景までの視距離③】 視対象となる海景は(H)にある。	《建築物》内高さ約6m 《視点場》高さ約1m(建築物内一階)	【視点場の状況⑤】 視点は平面的にも断面的にも水面から近い位置にある。
	品川驛 (品川区北品川1丁目)	【海景】視点場付近(約0m)にある。		《建築物》内高さ約0m 《視点場》高さ約1m(建築物内一階)	
	羽田神社 (大田区羽田6丁目)	【海景】視点場付近(約0m)にある。		《建築物》内高さ約0m 《視点場》高さ約1m(建築物内一階)	
	潮見神社Ⅱ (横浜市金沢区瀬戸)	【海景】視点場から約15mに位置する。		《建築物》内高さ約0m 《視点場》高さ約1m(建築物内一階)	
(6) 水面一体型 潮見神社 (横浜市神奈川区青木町)	潮見神社 (横浜市神奈川区青木町)	【海景】視点場付近(約0m)にある。		《建築物》内高さ約0m 《視点場》高さ約1m(建築物間のスリット内)	【視点場の状況⑥】 (D)の開放空間。

注) 表中「型の空間構成」における《》内の要素については海岸線からの距離について記載した。
また、成立要件における(A)は親しげな距離とされる12~24mの領域、(B)は一般に俯瞰しやすいとされる俯角8~30°の領域、(C)一般に緩やかとされる1:5以下の勾配、(D)は均整のとれた距離感が得られる1:1~1.5:1の道幅と建築物高さの比、(E)は建築として印象に残る距離とされる110m以内の領域、(F)は静視野60°の領域、(G)は耐えられない距離3m以上の快適と感じられる領域、(H)は波が認識できる50m以下の領域を示す。

(2) 各型の成立要件

①同時型

この型は、建築物内の高い視点場から、陸・海の異なる空間を同時一体的に眺められる特徴をもつ(表-2)。この型の該当事例である「高輪海邊 七月二十六夜待」(所在地: 港区高輪2丁目)では、図-4の「断面図」に示すように、建築物は海岸線から約20m内陸に立地し、視点はその建築物の二階床の高さ3.5m⁸⁾に一般的な視点の高さ1.5m¹¹⁾(着座時70cm)を加えた4.2~5mの高さにあることがわかった。これより、表-3の【視対象の視認状況①】に示すように、「一般に俯瞰しやすいとされる俯角8~30°の領域(以下「一般俯瞰域」とする)」¹²⁾に視対象(陸域と海域に創出したにぎわい)が眺められることが捉えられた。また、【海景までの視距離①】は約20mであり、これは視点から「親しげな距離とされる12~24mの領域(以下「親密距離」)」¹³⁾を満たすことから、視点場から路上でにぎわう人々の顔の表情が明確に視認で

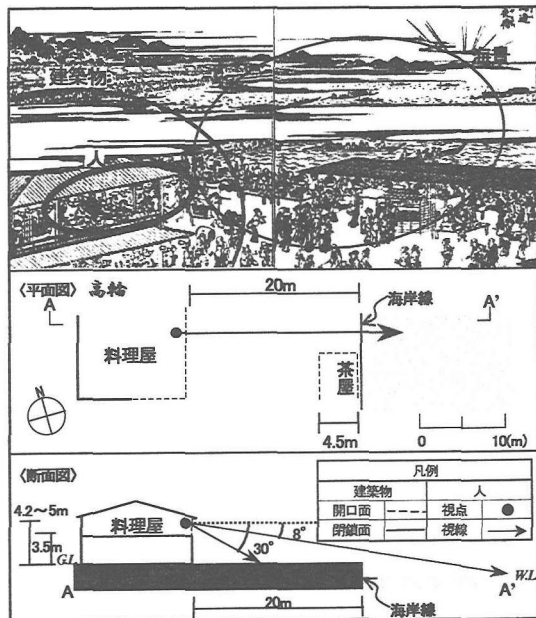


図-4 高輪海邊 七月二十六夜待

きるために、そのにぎわいの様子が手にとるように伝わってくる状況であることが把握できた。これらより、この型では、海・陸が同時に眺められるような視点の高さが確保され、その海・陸を「一般俯瞰域」と「親密距離」で眺められるという空間状況から、陸域の景観と海景との同時一体性が得られていると考える。

②開放型

この型は、高台に立地する建築物内部の視点場から、壁面の開口部を通して、開放的な海のパノラマ景が眺められるものである（表-2）。例えば図-5の「金龍院 飛石」（現在地：横浜市金沢区瀬戸）では、「平・断面図」より、視点場が海岸線から内陸約80m、標高約10mにあることから、海景への俯角は 8° 以下となった。よって表-3の【視対象の視認状況③】にあるように、海景は「一般俯瞰域」に含まれることから、視点場は海景が十分に眺めやすい位置にあることがわかる。また、視点場となる建築物は葎簀張りの茶屋で、高さは2.1m⁹⁾となり、建築物としてはやや低めであるが、【視点場の状況①】にあるように、壁面を全面開口にしているため、屋内というヒューマンスケールの視点場から、遠方の海景をダイナミックなパノラマ景として眺めることができるといえよう。

一方、図-6に示す「御殿山 看花」（現在地：品川区北品川3・4丁目）では、前述と同様のパノラマ景は望めるものの、「平・断面図」からわかるように、視点場は海岸線から内陸230^{※1}～280m、標高約10mにあることから、海への俯角は 4° となり、表-3の【視対象の視認状況②】は「一般俯瞰域」から外れる空間状況であるが、ここでは、桜や松の木間から海が眺められ、こうした視点場付近の景物を通じて意識が海へと導かれることにより海景が愛でられたと考えられる。

つまり、開放型は、視点場がヒューマンスケールな屋内であっても、その建築物の壁面が大きく開口されるなどして開放性を有することで、壮大な海のパノラマ景が望めるものである。その際に海への眺望が「一般俯瞰域」外にある場合には、桜や松といった自然物が視点場付近に存在することで、「木間越しの海景」という印象深い眺めが創出され、それにより海景へと意識が向けられるものとなる。

③視線誘導型

これは、海岸線から離れた内陸であっても、海方向へ

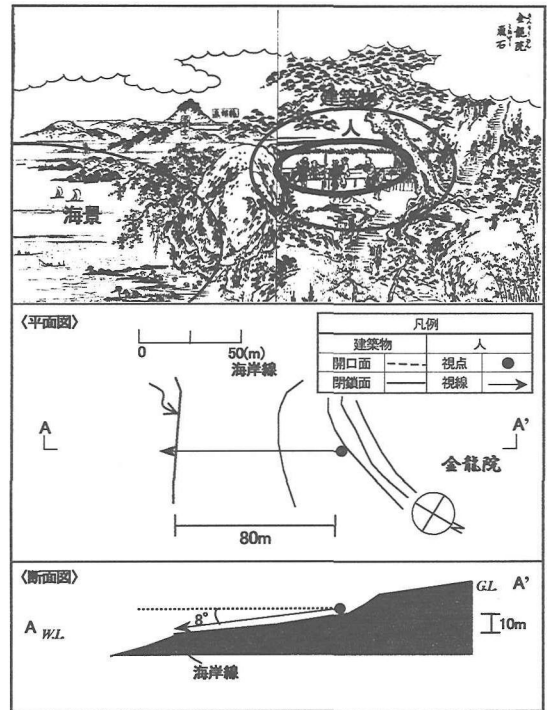


図-5 金龍院 飛石

伸びる坂道やその沿道の建築物などにより、視線が海景へと導かれる型である（表-2）。図-7の「潮見坂」（現在地：港区三田3丁目）では、視点場は海岸線から内陸405^{※2}～460m、標高10～18mの坂道にあることから、海への俯角は 2° となった。よって、表-3の【視対象の視認状況④】に示すように、海景は「一般俯瞰域」¹²⁾に含まれない空間状況にある。また、海方向へ下る坂（視点場）の勾配は図-7の「断面図」より1:7となり、【視点場の状況②】（表-3）は、「一般に緩やかとされる1:5以下の勾配」¹⁴⁾の坂道であることから、海方向を眺めたときに、坂道が視界に入りやすいものと考えられる。さらに、坂道の幅員とその沿道に立地する建築物の高さとの比は1.2:1となるため、【視点場の状況③】（表-3）にあるように、視点場は「均整のとれた圍繞感が得られる1:1～1.5:1の道幅と建築物高さの比（以下「適度な建物圍繞感」）」¹⁵⁾の空間にあることがわかった。

これらより、この型では、海が意識しにくいような内陸の街なかにあっても、海方向へ下る坂道が視界に入りやすい緩勾配であること、また坂の沿道の建築物が適度な圍繞感を有した立地や高さであることなどから、それらによって視線は海へと導かれ、海景が眺めやすくなっているといえよう。

④引き締め型

茫洋として視線が定まらない場合が多いとされる海景であるが、この型においては、建築物の間隙（スリッ

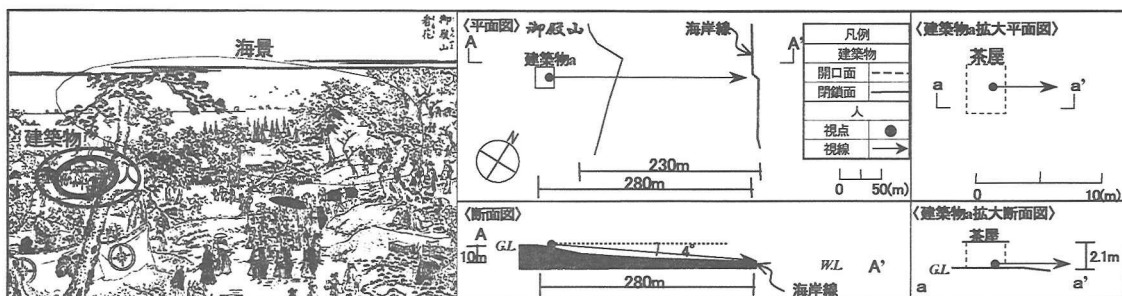


図-6 御殿山 看花

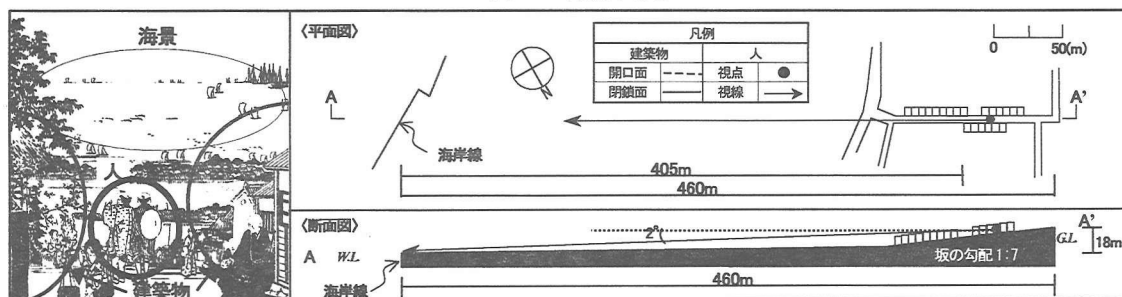


図-7 潮見坂

ト) やアイストップの存在によって、海景が引き締められるという特徴をもつ(表-2)。例えば図-8の「寒橋」(現在地: 中央区築地7丁目)では、「平面図」より、建築物と視点場はそれぞれ海岸線からほぼ0mと6~13mにあることから、表-3の【建築物までの視距離】は「建築として印象に残る距離の110m以内」¹³⁾に収まることがわかる。また、建築物のスリットの幅は1.8mであるため、【視対象の視認状況⑥】は、視点場から海景を眺めたときの「静視野60°」の領域(以下「静視野」)¹⁶⁾に建築物が含まれることがわかった。つまり、ここでは、建築物が視点場から認識しやすい位置にあり、海道上のどの視点場からでも必ず静視野内に含まれるような間隔をもつことで、海景の十分な引き締め効果を得ることができると思われる。

図-9に示す「佃島 住吉明神社」(現在地: 中央区佃1・2丁目)では、前述の「寒橋」同様に建築物越しに海景を眺めるものであり、建築物までの距離は110m以内で建築物が視認しやすい視距離にあるが、【視対象の視認状況⑤】(表-3)は、「平面図」に示すように、スリットを形成する建築物が「静視野」¹⁶⁾に含まれないことがある。しかし、ここでは、海岸線から沖合約200mにある当該絵図の主題である島(佃島)が対岸景として視認できることで、スリットが広い場合の引き締め効果(茫洋となりやすい海景に対する視線の止め)を支援していると考えられる。

以上のように「引き締め型」では、視点場とスリットを有する建築物との視距離が110m以内に

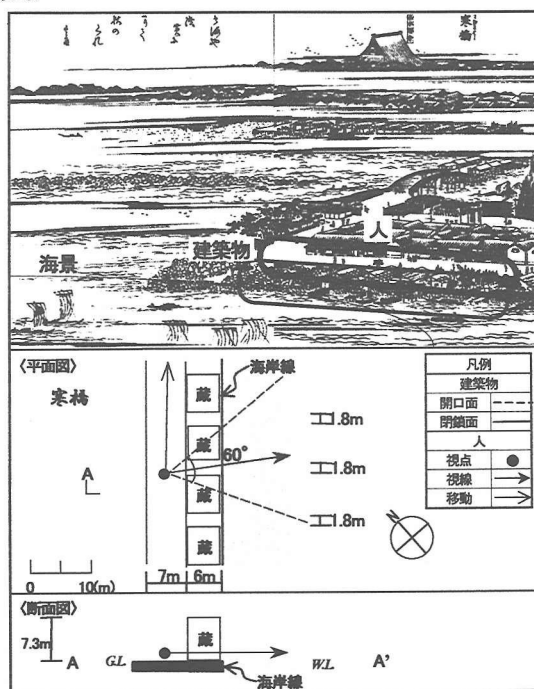


図-8 寒橋

あることで、海景の引き締め効果が期待できるといえよう。また、スリットの間隔が広くて、建築物が海景への「静視野」に含まれない場合でも、引き締め効果を支援するような、島や船舶等のアイストップが沖合に存在することで、引き締められた海景が眺められると考える。

⑤活動誘発型

この型は、潮の干満によって変化する海景に対し、それを眺める人の活動が誘発されるものである(表-2)。図-10の「洲崎辨財天社」(所在地:江東区木場6丁目)でいえば、建築物は海岸線から内陸12mに立地していることから、「拡大図」に示すように、屋内外双方の視点場間隔が「耐えられない距離」とされる0.9~3m¹³⁾以上となるため、表-3の【視点場の状況④】は、お互いが快適な距離を保った状態で海景が眺められるものといえよう。またここでは、屋内の視点場から視距離12mで解説に記された潮干狩りをする人々などが眺められ、【海景までの視距離②】(表-3)は「親密距離」¹³⁾に収まるため、そうした身近に感じる海辺でのにぎわいに誘われるようにして、屋外の視点場へと活動が誘発されるといえよう。

⑥水面一体型

この型は、建築物内または隣り合う建築物との間(屋外)にある水面近くの視点場から、海岸線付近の海景を眺めることで、水面との一体感が享受できるものである(表-2)。例えば図-11の「瀬戸明神社(Ⅱ)」(所在地:横浜市金沢区瀬戸)でみれば、「平面図」より建築物は海岸線からほぼ0mに立地し、「断面図」より視点はその建築物内(茶屋)の一階の座敷にあるため、その高さは約1mとなることがわかる。これより、【視点場の状況⑤】(表-3)は平面的にも断面的にも水面に非常に近いことがわかった。また海景は、視点場から約15m沖合にあるため、【海景までの視距離③】(表-3)は「波が認識できる50m以下の領域(以下「波の認識距離」)」¹³⁾に位置することが捉えられた。

図-12に示す「洲崎明神」(所在地:横浜市神奈川区青木町)では、護岸の形態が雁木(階段状の護岸)であることで、潮の干満や打ち寄せる波の動きなどが感じられる場所となり、その様子を眺める視点場の両端にある「建築物」の額縁効果(フレーム)により雁木やその周辺の水面が際立ち、その水面との一体感が享受できる。この空間状況は、上述の「瀬戸明神社(Ⅱ)」と同様、視点場と水面や波打つ雁木との近接性や「波の認識距離」といった要件を満たしており、さらに【視点場の状況⑥】が1:0.7(建築物間の距離:建築物の高さ)の圍繞空間となっていることが把握できた。このことから、視点場が屋外にあるときには、「適度な建物圍繞感」¹⁵⁾を創出する2棟の建築物から垣間見える、波打つ雁木によってその前面の水面との一

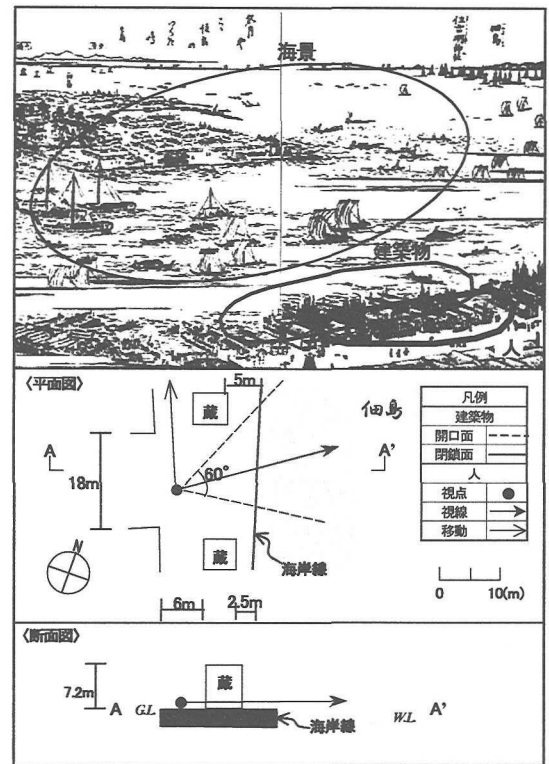


図-9 佃島 住吉明神社

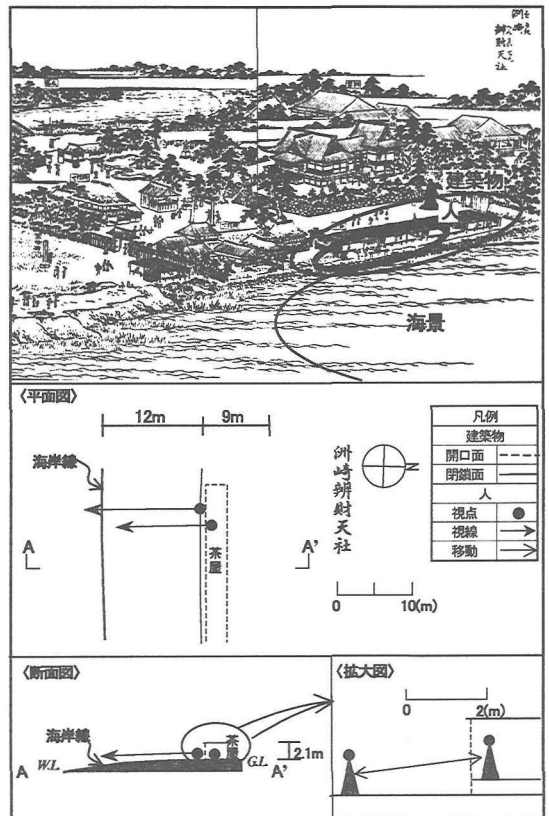


図-10 洲崎辨財天社

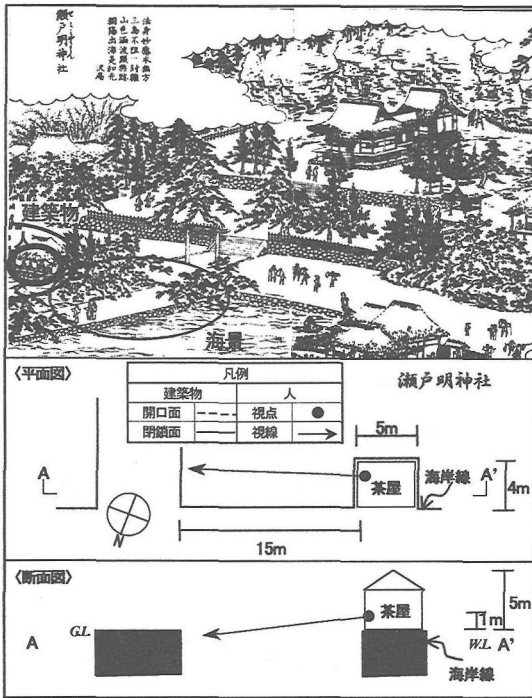


図-11 瀬戸明神社(Ⅱ)

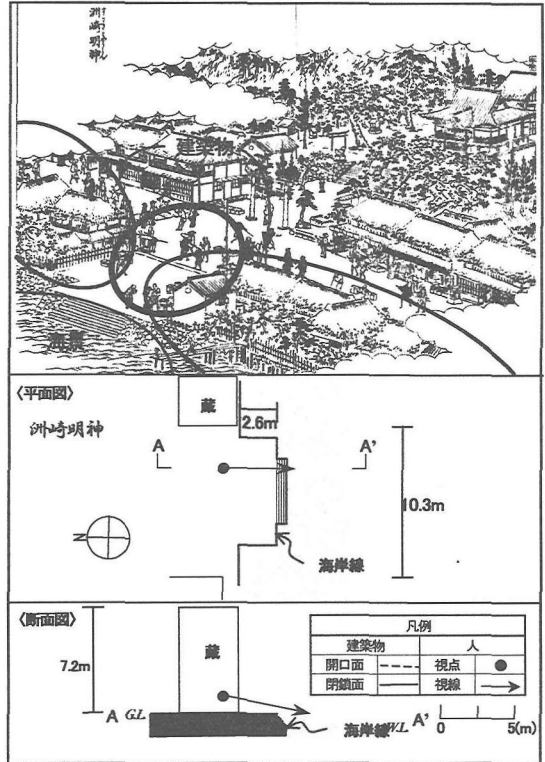


図-12 洲崎明神

表-4 「海景観賞の型」の成立要件

型名	成立要件
(1) 同時型	視対象となる陸上と海上に創出したにぎわいは「一般俯瞰域」に見られ、その視対象までの視距離は「親密距離」であることで、海・陸という異なる空間が同時一体的に眺められる。
(2) 開放型	建築物が柱と屋根で構成されることで、ヒューマンスケールの屋内からダイナミックな海のパノラマ景が享受できる。また、海景への俯角が 8° 以下となり、「一般俯瞰域」に海景がない場合は、視線を海へ導くような添景物(自然物)が視点場近傍にあることで海景が眺めやすくなる。
(3) 視線誘導型	海景が「一般俯瞰域」にない場合でも、視野に入りやすい緩勾配の坂や、視点場が適度な困憊感を得られるような建築物の配置や高さであることで視線は海へ導かれる。
(4) 引き締め型	海景においてスリットまたはアイストップを形成する建築物は、視点場から「建築として印象に残る110m」以内にある。ただし、スリットを形成する建築物が、特定の視点場から「静視野」に含まれない場合は、沖合に離島や船舶等によるアイストップの存在によって引き締め効果が得られる。
(5) 活動誘発型	屋内の視点場から3~24mに海岸線付近での人の活動が眺められるため、屋内から屋外へ活動が誘発され、双方の視点場間においては、視覚的に快適な距離が保たれる。
(6) 水面一体型	水面に近くの建築物内の視点場から、「波の認識距離」50m以内にある海景を眺めることで、水面との一体感が愛でられる。また、視点場が水面に近くの屋外である場合でも、「適度な建物困憊感」が創出されることで水面との一体感が得られる。

体感が得やすいものと考えられる。

よって「水面一体型」は、海景が「波の認識距離」(近景域)にあり、さらに視点場が平面的にも断面的にも水面に近い屋内であることで、ヒューマンスケールの海景との一体感が得られるといえる。また、屋外の視点場からは、海岸線沿いの建築物が「適度な建物困憊感」を創出することや、水面を強調する雁木などの存在によって、水面一体性を得ることができよう。

4. まとめ

以上より本研究では、「人」「建築物」「海景」の

3要素によって創出される「海景観賞の型」において、各型の成立要件として、表-4に示すような海景を観賞する際の見の人と見られる対象がもつ視覚構造が捉えられた。

現代のウォーターフロントを構成する3要素においても、このような視覚構造をその計画・整備に活かして、多彩な海景を創出していくべきと考える。

最後に、資料収集および資料整理にあたり、ご協力いただいた日本大学大学院の神宮字良太氏に、記して感謝の意を表します。

【補注】

※1 海岸線から視点場までの間に存在する建築物の高さを考慮すると海岸線から230 mまでは不可視領域となる。
 ※2 補注※1と同様の考慮により海岸線から405 mまでは不可視領域となる。

【引用・参考文献】

- 1) 篠原修: 水体験の意味論と景観設計, ボラード Vol. 6, pp. 8~11, (財)港湾空間高度化センター, 1990. 3
- 2) 上島顕司・善見政和: 伝統的な水辺空間における眺望及びアクセスのデザイン原則に関する研究, 土木計画学研究・論文集 No. 16, pp. 473~478, 1999. 9
- 3) 陣内秀信: ビジュアルブック江戸東京 5 水の東京, 岩波書店, 1993. 3
- 4) 石川英輔ほか: 原寸復刻江戸名所図会, 上・中・下巻, 評論社, 1996. 12
- 5) 市古夏生・鈴木健一: 新訂江戸名所図会, 全 8 冊, 筑摩書房, 1996. 10~1997. 2

- 6) 児玉幸多・復元・江戸情報地図, 朝日新聞社, 1999. 5
- 7) 迅速測図原図復刻版編集委員会: 明治前期手書彩色関東実測図, 東京日本地図センター, 1991. 3
- 8) 千葉正樹: 江戸名所図会の世界, 吉川弘文館, 2001. 3
- 9) 樋口清之: ヴィジュアル百科 江戸事情 第五巻建築編, 雄山閣出版株式会社, 1993. 5
- 10) 陣内秀信: 江戸東京のみかた調べかた, 鹿島出版会, 1993. 9
- 11) 芦原義信: 外部空間の構成, 彰国社, 1962. 4
- 12) 篠原修: 新体系 59 土木景観計画, 技報堂出版, 1999. 4
- 13) 高橋鷹志ほか: 外部空間のディテール① 計画手法を探る, 彰国社, 1978. 8
- 14) 総合ユニコム: 公園開発・整備実務計画資料集, 1989. 12
- 15) 天野光一: 水辺の景観設計, 技報堂出版, 1988. 12
- 16) 篠原修: 景観用語辞典, 彰国社, 1999. 6

わが国における「海景観賞の型」とその空間構成に関する研究*

—江戸名所図会にみる視覚構造を通じて—

岡田智秀**・横内憲久**・島妃沙子***

ウォーターフロント開発の魅力には、海の景観（海景）の一望性がある。その魅力は、海とそれを眺める人の間に建築物が介在することでさまざま生み出される。そこで本研究ではウォーターフロントにおける建築物の景観的役割を明らかにするため、「江戸名所図会」を分析資料として、人と建築物と海との3要素の関わり方から抽出した6つの「海景観賞の型」について、その空間構成がどのような視覚構造によって成り立っているかを捉えることで、「海景観賞の型」を成立させる要件を明らかにした。

A Study on Types of Ornamental Seascape and its Space Structure in Japan*

—From visual construction in 'Edo-Meisho-Zue'—

BY Tomohide OKADA**・Norihisa YOKOUCHI**・Hisako SHIMA***

The purpose of this research was to grasp maritime scenery (types of scenery appreciation) being created through the combining of “persons,” “buildings,” and the “sea.” In this research, “Pictures of Famous Locations in Edo” (Edo Meisho Zue), a collection of drawings produced in the Edo Period, was analyzed, and six types of marine scenery appreciation were identified. Further, the visionary structure of individual types was revealed based on relations of elements that compose these types and persons (viewpoints).